

# 研究所報

No. 28

1992. 9. 30.

目次	研究所の学外移転に伴う課題	
	所長 武田 武麿	1
	1992年度「指定研究」研究計画紹介	2
	1992年度「一般研究」選考結果発表	3
	1992年度「一般研究」研究目的紹介	4
	1991年度「指定研究」研究経過報告	6
	ハーバード大学の仏教研究	13
	学会参加報告	17
	1992年度前期開放セミナー	22
	兼報	23

## 研究所の学外移転に伴う課題

所長 武田 武麿

学内西北の一隅に、1号館に囲まれるようにあった「真宗総合研究所」の三階ビルが取り壊されて、新たな建物が建てられることになった。文学部「国際文化学科」の来年度新設に際し、主としてその諸設備を内容とする1号館の増築工事が施工せられることになったからである。この建て替えそれ自体は、先年来進められてきた学内キャンパスの総合企画整備の、最終的に残っていた改築予定の部分であった。しかしこの計画の進捗のために、研究所は、当分の間、つまり現在のところいつまでという保証がないまま、学外へ転移を余儀なくされたのである。移転先は、「学外実習棟」として維持されてきた、寺町今出川上に所在する旧「育英学寮」であった。この研究所の学外への移転は、大谷大学の研究・教育の今後に、いろいろな意味で問題を提起することになったといえるのではなからうか。

時あたかも今年度は、真宗総合研究所が設置せられて、まさに十年目に当たっている。その当初の研究所の出発を思い返すに、この研究所の名称について、いろいろな意見があった。最終的には「真宗総合」か「真宗文化」かのいずれを採るか、当時学長の広瀬果先生の決断に依ったのである。その採用の基本的意義については、先生自身の開所式挨拶の文章に詳しく述べられている。その内容は、広く大谷大学における研究・教育の資質を再考するに忘れることのできない記念碑的なものである。それらの経過を踏まえての研究所であってみれば、今回の学外への移転をどのように受け止めておくべきか、重要な問題とすべきであろう。

この際思われるに、本学のこの研究所があまり他大学の研究所に見られない独特の在り方をしてきた点である。その特徴の一つが、研究所の専任

教職員が一人も居ないということである。「総合」とは、まず、大谷大学を構成する大学院4専攻・文学部6学科16分野・短期大学部3学科の、それぞれの垣根をいかに乗り越えていくかということ、第二に、教育の場として、そしてまた研究の場として開かれている両面が、有機的な連関をいかに保っていくかということ、第三に、その教育・研究の建学の理念にいかに対応していくかということ、これらいずれもが、大谷大学を構成する一人一人において成就していくことを内容とする。その確認の場として、研究所が提供されている。機構的にも、大学の中で分離独立することなく、その役割が果たしえるように考えられたのである。そのような点を考慮して、専任を置くことなく、誰もが関われるように設置されたのであった。「指定研究」と「一般研究」のいずれにおいても、研究成果への期待は、基本的にこれらの意味の上に立っている。

そうであるとするなら、研究所の設置される場所は学内にあってこそ、適切といえるであろう。この度の学外移転は、あくまでやむを得ざる移行措置である。幸いにも、木造の旧寮は、しっかりした基礎と瀟洒な外観によって、見違えるほどのものとなった。少々狭くなったことと、構造的に寮室から研究室への改装にやや無理な面があることは仕方がないとしても、当面の研究所としての機能を損なうものではない。しかし学外へ去った事実は、近い将来に再度の学内への移転まで、存立理念とこれまでの歩みと現状を、再点検する絶好の機会を得たともいえよう。今、大学状況を思う時、十分な回答を提起しなければならない。ちょうど十年目に与えられた課題である。

## 大谷大学真宗総合研究所

## 1992年度「指定研究」研究計画紹介

1992(平成4)年度の「指定研究」の研究計画及び研究組織が、真宗総合研究所委員会において審議され、下記のように決定した。

今年度の「指定研究」は、特定研究に「大学史編纂研究」と「国際仏教研究」の二件が、委託研究に「真宗史料研究」、「西藏文献研究」、「大藏経学術用語研究」の三件が承認された。特定研究の「大学史編纂研究」と「国際仏教研究」は、前年度からの継続で二年目にあたる。ともに大谷大学における大きな課題の下に置かれたプロジェクトであるが、着実な研究を通して具体的な成果を目指すことが期待される。委託研究の三件についても、継続して研究事業を進め、成果を得ることが期待される。

研究名	研究課題及び研究組織
特定研究 大学史編纂研究 代表者 学長・寺川俊昭	研究課題 「近代における大谷大学の成立と展開の研究」 研究員 福島光哉(チーフ・教授・仏教学) 藤島建樹(教授・東洋史学) 神戸和麿(教授・真宗学) 延塚知道(助教授・真宗学) 三明智彰(専任講師・真宗学) 宮崎健司(専任講師・日本史学) 武田武麿(所長・教授・宗教学) 宮下晴輝(主事・助教授・仏教学) 稲葉広由(博士課程修了・仏教学) 研究補助員
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・寺川俊昭	研究課題 「諸外国における仏教受容の様相の研究」 研究員 多田稔(チーフ・教授・英文学) 安富信哉(助教授・真宗学) 加来雄之(専任講師・真宗学) 桂華淳祥(専任講師・東洋史) ロバート・ローズ(専任講師・仏教学) 武田武麿(所長・教授・宗教学) 宮下晴輝(主事・助教授・仏教学) 樋口章信(本学非常勤講師・真宗学) 加藤均(博士課程修了・仏教学) 菊池哲(博士課程・仏教学) 嘱託研究員 研究補助員
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・寺川俊昭	研究課題 「本願寺近世近代史料の研究と翻刻並びに出版」 研究員 大桑斉(チーフ・教授・日本近世史) 木場明志(助教授・日本近代史) 草野顕之(専任講師・日本仏教史) 上場顕雄(本学非常勤講師・日本仏教史) 福島和人(元大谷高校教諭・日本近代思想史) 西田真因(真宗大谷派教学研究員・真宗教理史) 谷端昭夫(裏千家学園講師・日本文化史) 熊野恒陽(博士課程・仏教文化) 福島栄寿(博士課程・仏教文化) 上杉義麿(博士課程・仏教文化) 嘱託研究員 研究補助員
委託研究 西藏文献研究 代表者 学長・寺川俊昭	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版大藏経及び蔵外文献の文献研究」 研究員 小川一乘(チーフ・教授・仏教学) 片野道雄(教授・仏教学) 小谷信千代(助教授・仏教学) 白館戒雲(助教授・仏教学) 高田順仁(博士課程修了・仏教学) 研究補助員
委託研究 大藏経学術用語研究 代表者 学長・寺川俊昭	研究課題 「『大正新脩大藏経』寶積部関係典籍における学術用語の研究」 研究員 鍵主良敬(チーフ・教授・仏教学) 古田和弘(教授・仏教学) 一色順心(助教授・仏教学) 木村宣彰(助教授・仏教学) 織田顕祐(専任講師・仏教学) 兵藤一夫(専任講師・仏教学) 山野俊郎(専任講師・仏教学) 研究補助員

## 大谷大学真宗総合研究所

## 1992年度「一般研究」選考結果発表

1992(平成4)年度の「一般研究」が、真宗総合研究所委員会において慎重に選考され、次のように決定した。本年度の「一般研究」は、(A)共同研究三件、(B)個人研究一件である。

共同研究のうち、神戸和磨教授を代表者とする「清沢満之の研究—信仰・思想・実践—」、及び長崎法潤教授を代表者とする「仏教学教育法の研究」は、昨年度からの継続研究である。また同じく共同研究の木場明志助教授を代表者とする「真宗によるアジア開教・教育事業記事の集成」と、個人研究の中桐伸吾助教授「体育とスポーツのイメージの計量的分析」とは、新規の研究である。

## (A)共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
神戸 和磨	研究課題 「清沢満之の研究—信仰・思想・実践—」 研究組織 神戸 和磨 (教授・真宗学) 小野 蓮明 (教授・真宗学) 安富 信哉 (助教授・真宗学) 延塚 知道 (助教授・真宗学) 安藤 文雄 (専任講師・真宗学) 加来 雄之 (専任講師・真宗学) 藤嶽 明信 (専任講師・真宗学) 三明 智彰 (専任講師・真宗学) 一楽 真 (助手・真宗学)	200万円
長崎 法潤	研究課題 「仏教学教育法の研究」 研究組織 長崎 法潤 (教授・仏教学) 一色 順心 (助教授・仏教学) 小谷信千代 (助教授・仏教学) 木村 宣彰 (助教授・仏教学) 吉元 信行 (助教授・仏教学)	200万円
木場 明志	研究課題 「真宗によるアジア開教・教育事業記事の集成」 研究組織 木場 明志 (助教授・歴史学) 桂華 淳祥 (専任講師・歴史学) 槻木 瑞生 (同朋大学教授・歴史学) 小島 勝 (龍谷大学教授・歴史学)	200万円

## (B)個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
中桐 伸吾	研究課題 「体育とスポーツのイメージの計量的分析」 研究組織 中桐 伸吾 (助教授・体育学)	100万円

## 1992年度「一般研究」研究目的紹介

### <共同研究>

### 清沢満之の研究 —信仰・思想・実践—

研究代表者 教授 神戸 和磨  
(真宗学)

本研究は、本学の学祖であり、かつ近代日本におけるすぐれた宗教者である清沢満之について総合的に研究しようとするもので、昨年度の継続研究である。昨年度は清沢満之の信仰・思想・実践について、それぞれ担当者を決め、真宗学の立場から、基本的資料を収集し、討議しながらの資料検討を重ねてきているが、とても十分であるとは言えない。本年度は、更に幅広い視点からの資料収集をすると共に、討議をふまえての研究成果を論文として公表していく必要が認められる。また、討議の題材として、多方面の専門家による検討にも協力を要請していくことも考えている。

### <共同研究>

### 仏教学教育法の研究

研究代表者 教授 長崎 法潤  
(仏教学)

本学でなされている仏教学の教育は、主に仏教文献をもとにして、教員から一方的に知識を与えるという方法を取り、必ずしも現在の学生に対して十分な教育的効果をあげているとは考えられない。早急に仏教教育における新しい方法を研究し、導入しなければならない。このような反省のもとで、本研究は仏教学科全教員の強い要請によってスタートした。昨年4月から現在までのところ、(1)仏教系各大学における仏教学のカリキュラム、教育内容の調査、(2)オーディオ・ヴィジュアルの教材の収

集、ならびに教育現場におけるその活用方法の検討、(3)インド仏跡踏査旅行における教育的効果の検討などの諸点から研究を重ねている。

仏教系各大学の教育内容は、現在大きく変わりつつあり、流動的である。したがって、昨年度の調査だけでは不十分であり、本年度も調査を続ける必要がある。教材に関しても、さらに幅広く収集し、その活用方法を研究しなければならない。そのほか、宗教系諸大学の教育方法、外国の大学の宗教教育などについて検討し、学内外の学識経験者の意見を参考にしながら、本学における宗教学教育法について、新しい展望を開こうとするものである。

### <共同研究>

### 真宗によるアジア開教 ・教育事業記事の集成

研究代表者 助教授 木場 明志  
(歴史学)

昭和61年度共同研究「東本願寺中国布教史の基礎的研究」、平成2年度共同研究「近代における真宗の対アジア布教の展開過程」による成果をふまえ、近代における真宗東西両派（大谷派・本願寺派）によるアジア諸地域への開教事業、およびそれに伴った教育事業について、その展開の概要と傾向とを網羅的に示すことに目的をおく。アジア諸地域での事業の展開と推移を通して、それぞれの地域の宗教・歴史・教育・文化の動向に与えた影響を、年代に沿って動態的に把握しようとするものである。

具体的には、宗教新聞、真宗東西両派機関誌、両派系雑誌の1868年～1945年分を素材に、記事目録と抜粋主要記事を蒐集整理して集大成し、データベース化を図って学界の共同利用に供することを旨とする。

特色としては、日本近代史（木場）、中国近世近代史（桂華）、アジア教育史（榎木）、教育社会学（小島）の異分野研究者が合同して網羅的な開教・教育記事目録の作成を期していることであり、記事目次・記事本文の集大成とデータベース化は、今後の関連諸研究のためのレファ

レンス機能を果たしていける基礎成果となるのが確実視できることであろう。

戦前期までの日本とアジアの接触の記録の蒐集ということであって、日本人（僧）がアジア諸地域に直接に関わって懊悩し、またアジア諸民族が日本人のそうした行動に遭って、自らの文化との間で葛藤した記録として、実は貴重な資料的遺産を有していたことに気づいての研究企画である。

汎宗教紙の『中外日報』『文化時報』『明教新誌』、大谷派機関誌『配紙』～『真宗』、本願寺派機関誌『教海一瀾』などの1945年までの全冊をデータ化していくため、できれば2年間の継続研究として認可して載けるよう希望したい。『中外日報』については、すでに半分程の作業を終えているところであり、研究計画の実現性については約束できる状況にある。

### <個人研究>

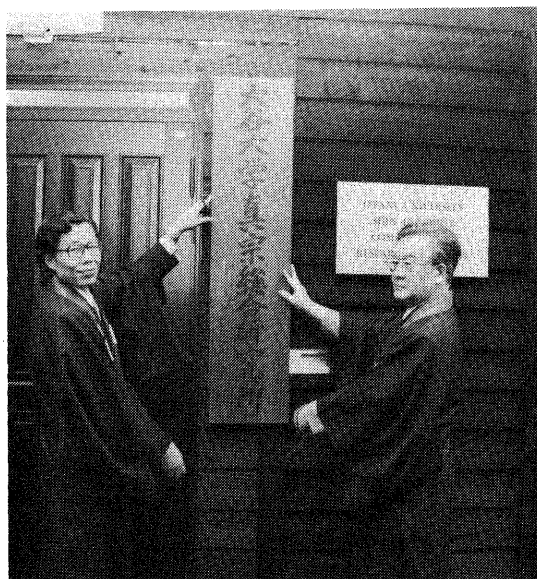
## 体育とスポーツの イメージの計量的分析

研究代表者 助教授 中桐 伸吾  
(体育学)

研究の目的：SD法により、体育（学校体育）とスポーツのイメージを比較したところ、差異が見られることを大谷大学研究年報第41集で報告した。さらにその差異を明確化するために、SD法の新しい尺度項目の作成を試み、因子分析の結果、体育とスポーツのイメージは評価性因子、快感性・有能感因子、力動性因子、主体性因子、技能性因子から構成されていることが明らかとなった（『大谷学報』第71巻第4号 1992年発刊予定）。そこで本研究は、大学生の男女を対象にして、体育およびスポーツに対する好意度より、体育とスポーツのイメージの差異を前述した5因子より比較検討しようとするものである。そして、大学での体育がどうあるべきかを考えたい。

研究の特色・獨創性：従来より、一般的に学生は体育よりもスポーツに対して好意的であると指摘されている。しかし、その原因についての詳細な研究はほとんど見られない。そこで、本研究ではイメージという面より、体育とスポーツの違いを明確化しようとするものである。そして、その結果をもとに大学での体育の指導はどうあるべきかを考察し、授業の指針としたい。

年度内での研究：研究の目的にも記したように、大学生の男女を対象にし、体育とスポーツの好意度とそのイメージの差異を多変量解析等を用いて比較検討を行なう。



真宗総合研究所 移転開所式（'92.7.17）

1991年度

## 「指定研究」研究経過報告

## 大学史編纂研究

「近代における大谷大学の成立と  
展開の研究」

研究員・チーフ 福島 光哉

「大学史編纂研究」は、1985年以来続けられた「真宗学事研究」の研究蓄積をもとに、大学史編纂業務そのものに着手すべく、発足した特定研究である。1991年度は、『大谷大学三百二十年史』の略年表作成と大学史のうち明治期の略述を大きな柱として、各研究員がそれぞれ分担し、研究に着手することになった。

## I. 「研究」

## a) 研究会

1. 日時 1991年5月16日  
講題 「ヨーロッパにおける大学の成立事情」  
発表者 研究員 土戸 敏彦 氏
2. 日時 1991年6月18日  
講題 「ベルリン大学の成立事情」  
発表者 研究員 土戸 敏彦 氏
3. 日時 1991年12月19日  
講題 「資料の解題」  
発表者 研究員 宮崎 健司 氏
4. 日時 1992年3月13日  
講題 「満之の教育観—自信教人信—」  
発表者 研究員 神戸 和麿 氏

## b) 連絡会

1. 日時 1991年7月24日  
議 題 夏季休暇中の研究計画について  
その他
2. 日時 1991年10月31日  
議 題 今後の研究計画について  
その他
3. 日時 1991年12月12日  
議 題 諸報告  
その他

## c) 『研究所報』27号

「特定研究・新プロジェクトの発足にあたって」

福島 光哉 氏

「ヨーロッパにおける大学の成立事情  
—中世の大学の起源とベルリン大学の設立—」

土戸 敏彦 氏

## II. 「資料調査」

1992年2月15日～17日の日程で、延塚知道研究員と稲葉広由研究補助員の両氏が、東京大学宗教学研究室に「明治期の東京帝国大学カリキュラム及び清沢満之関係史料」の調査・採集を行った。

## 国際仏教研究

「諸外国における  
仏教受容の様相の研究」

研究員・チーフ 多田 稔

「国際仏教研究」班は、1991年度に新しく発足した。本研究は、近年著しい仏教研究の国際化の中で、諸外国における仏教受容の現状を把握し、国際的交流を推進することによって、大谷大学全体の研究教育状況に刺激を与え、活性化を目指すことにある。主たるテーマを「諸外国における仏教受容の様相の研究」とし、このテーマを推進するために基本の方針を以下のような4点として定めた。

- 1: 文化的対話のための調査研究
  - a. 海外の人材の受け入れ方法
  - b. 海外への人材派遣の方法
  - c. 国内国外の研究機関との相互関係をもつための方法
- 2: 国際的な研究テーマの紹介  
最近の海外の仏教研究の傾向を広く学内に紹介していく
- 3: 仏教研究の海外への紹介  
本学における学問的蓄積を海外に紹介するための翻訳作業のための人材予算など具体的な方法と可能性を探す
- 4: 資料収集・整理・公開

「海外仏教研究」時代からの資料収集作業の継続と、資料を十分に活用し得る体制を作り、広く公開する。

また本研究では、これまでの海外仏教研究では充分とは言えなかったアジア諸国との交流にも目を向けていく。

本年は初年度であるため、基本方針の中で、とくにどのように「国際交流」を計っていくかという具体的方法を模索することを軸とした。

上記の研究目的を達成するために、本年度中に行った具体的な研究活動は、

- 1) 研究員による研究会
- 2) 海外で活躍する研究者を招いての研究会の開催
- 3) 海外における学会への研究員の派遣
- 4) 「海外仏教研究」班の継続としての資料収集とコンピュータによるデータベース化

の4点として整理することができる。以下、この研究活動に基づき研究成果を報告する。

#### 【研究成果】

##### 1) 研究員による研究会

初年度は今後の研究の基本方針を定めることに力を注いだ。とくに大谷大学の独自性をもった「国際交流」とはどのようなものであるかを明らかにするために、所長・主事を含めた研究員によって定期的に以下のように研究会をもち、きめ細かい作業計画を立てた。

4月24日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 研究目的と方法の確認  
2. その他

5月1日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 国際真宗学会への参加について  
2. 研究組織について  
3. その他

5月22日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 研究補助員について  
2. 公開講演会について  
3. その他

5月29日(水)午後2時 於 真宗総合研究所21研究室  
研究会

- 議題 1. 資料収集、図書整理について  
2. その他

5月31日(金)午後4時 於 真宗総合研究所21研究室  
研究会

- 議題 1. 嘱託研究員について  
2. 国際仏教学会への参加について  
3. その他

6月5日(水)午後4時 於 真宗総合研究所21研究室  
研究会

- 議題 1. アジア関係の国際交流について  
2. 海外の人材の受け入れについて  
3. その他

6月12日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 公開講演について  
2. その他

7月8日(月)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. ビジティング・スカラについて  
2. その他

10月2日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. パークレー国際真宗学会報告  
2. その他

11月6日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. AAR 参加について  
2. 資料の収集ならびに整理に関する報告  
3. その他

12月4日(水)午後0時30分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. AAR 参加報告  
2. その他

1月8日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 国際交流について  
2. その他

2月12日(水)午後0時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 本年度のまとめにむけて  
2. その他

2月26日(水)午後1時 於 真宗総合研究所会議室  
研究会

- 議題 1. 本年度のまとめについて  
2. 第2回国際仏教文化交流研究会への参加について  
3. その他

##### 2) 国内外で活躍する研究者を招いての研究会の開催

「国際交流」という課題を実現するためには、研究者との交流を計り、また最新の研究の動向を知ることは不可欠である。本研究では、そのために海外で活躍している研究者を招いて以下の研究会を行った。本年は、初年度でもあり、今後の研究の基本方針を決定するという目的から、原則として一般公開ではなく、本研究の研究員を中心に研究会を行った。

- 6月14日(金)午後4時30分 於 博綜館多目的ホール  
公開講演会  
「Faith of the Wake of the *Dhammapada*」  
コルゲート大学教授 ジョン・ロス・カーター氏  
(通訳 樋口)
- 6月26日(木)午後0時 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「クラウス・オッテ神学博士との懇談会」  
クラウス・オッテ神学博士  
(通訳 樋口)
- 7月16日(火)午後0時 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「台湾における仏教研究の状況」  
台湾中興大学歴史科助教授 黄 依妹氏
- 7月22日(月)午後4時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「ボン教大蔵経について」  
フランス国立科学センター主任研究員  
サンテン・ギャルツェン・カーメイ氏  
(通訳 樋口)
- 11月21日(木)午後4時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「今枝由郎博士との懇談会」  
フランス国立科学センター研究員  
今枝由郎氏
- 11月26日(火)午後4時10分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「ロシアにおける仏教」  
龍谷大学招待研究員  
ガブリエル・パウエル氏
- 2月26日(木)午後4時 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「中国における最近の仏教研究の状況」  
国立社会学院仏教研究室主任  
楊 曾文氏
- 3月4日(水)午後4時 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「マッキントッシュによる多言語多文字処理」  
フランス国立科学センター研究員  
今枝由郎氏
- 3月24日(火)午前10時30分 於 真宗総合研究所会議室  
研究会  
「米国における浄土思想の研究について」  
バーモント大学教授 アラン・アンドリュース氏

## 3) 研究員の海外における学会への派遣

本研究の最新の研究動向を知るために、また国際的交流を図るためにも、本研究班では年度始めに、海外で開催される学会で積極的に参加すべき学会を選出し、可能な限り研究員を派遣した。その目的は、以下の4点である。

- 1) 研究者との交流
- 2) 研究者研究機関の最新情報の収集
- 3) 最新の仏教研究の動向の情報収集
- 4) 国際交流の方法

本年度は以下の三つの学会に研究員を派遣した。

## ①国際真宗学会第5回大会 (The Fifth Biennial Conference of International Association of Buddhist Studies)

時: 1991年8月3日(土)より8月5日(月)まで

場所: アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー  
カリフォルニア大学バークレー校 (University of California at Berkeley) のアルムナイ・ハウス (Alumni House)

テーマ: "Shin Buddhist Studies: The First Decade Retrospect and Prospect"

## 参加研究員

多田 稔 (教授) パネル応答者  
安富信哉 (助教授) 研究発表  
加来雄之 (専任講師)

## 参加教員

一楽 真 (助手)  
樋口章信 (非常勤講師) 研究発表

多田研究員 (チーフ) は "The State of the Art in Shin Buddhist Studies: Problems of Interpretation" に Respondent として参加した。また安富研究員は "Kane-ko Daiei's *Shinshu-gaku-josetsu* Reconsidered" の題目で、樋口氏は "The Modernization of Shin Faith: Kiyozawa's Shinnen as a Modern Expression of Shinran's Shin no ichinen" という題目で研究発表を行った。

学会の詳細については、『研究所報』No.27に、多田稔研究員 (チーフ) が「第5回国際真宗学会参加報告」、樋口章信氏が「第5回国際真宗学会に参加して」と題して報告している。また『親鸞教学』60号に「国際真宗学会第5回大会に参加して」と題した一楽氏の報告が掲載されている。

## ②アメリカ宗教学会1991年度大会 (The 1991 Annual Meeting of the American Academy of Religion)

時: 1991年11月23日(土)より11月26日(火)まで

場所: アメリカ合衆国ミズーリ州キャンサスシティ  
アリスプラザホテル、バートルホール

## 参加研究員

宮下晴輝 (専任講師)



加来雄之（専任講師）

学会の詳細については、加来研究員によって本『研究所報』に「アメリカ宗教学会参加報告」と題して報告されている。

### ③宗教與文化国際学術研討会

日程：1993年3月27・28日

場所：台湾新莊市輔仁大学

参加研究員

桂華淳祥（専任講師）

学会の詳細については、本『研究所報』に「宗教與文化国際学術研討会参加報告」と題して報告されている。

### ④「海外仏教研究」班の継続としての資料収集とコンピューターによるデータベース化

「海外仏教研究」班の継続作業として、海外の仏教研究に関する文献資料の収集を行い、マイクロ・コンピューターによってデータベース化を行った。その作業成果の一環は「国際仏教研究」班収集欧文雑誌目録」として『研究所報』No. 27に報告されている。

## 真宗史料研究

### 「東本願寺近世近代史料の研究と翻刻並びに出版」

研究員・チーフ 大桑 斉

本研究は、1991年度より新たに委託研究として着手して初年度を終えたところである。

近世近代の東本願寺関係史料については、多くの未整理あるいは整理不完全のものがあり、また整理されているものについても未公開、未公刊である場合が多い現状にある。本研究は、そうした未整理分・整理不完全分の整理、重要史料の翻刻、並びに出版を目指して始められた。そして、ようやく一年を経て基礎的作業を軌道に乗せるに至ったことであり、それらの経過について、以下に概略を報告する。

#### 1. 未整理・整理不完全史料の整理・目録作成作業

近世近代の東本願寺史料は、大谷派教団史・大谷大学史にとって重要であるが、それ以上に、日本史研究において注目されている宗教と国家の関わりを解明する上で、貴重な史料群である。しかしながら整理が十分でないものもかなり多く、本研究班では、まず、大谷派宗務所から大谷大学に整理の要請がなされていた園林文庫の整理、および目録作成を手がけることとなった。

4月早々より研究チーフ（大桑）と大谷派宗務所担当部局との間で打合せが重ねられ、東本願寺枳殻邸内燕申堂に所蔵される園林文庫の史料確認のための調査から実施に移すこととした。5月22日の研究所委員会での計画承認をうけ、5月24日に史料確認調査作業を行った。宗務所教育部・総務部・教務部の協力のもとで、研究所側からは研究員およびアルバイト学生等約20名が赴き、昭和28年9月宗務所庶務部作成の「園林文庫調査目録」（2冊）に基づいて、1点ずつにわたってその有無と史料点数の確認を進めた。より詳細な分類目録の作成が必要と認められる判断から、それら確認史料総数11,640点は、全182箱の段ボールに収めて、翌25日に大谷大学に搬入し、1点ずつについて改めてカード式で目録作成作業を行うという手順が考案された。

ちなみに、園林文庫は近世末期から明治維新期に宗主としてあった達如・厳如両上人の手元の書類や古記録類を中心とするもので、当時の大谷派教団の動向や国家行政との関わりを窺い知る第一級の史料群を蔵している。かつて先掲のような目録が作成されているものの、短期集中的な調査であったために完全でなく、また収蔵の箱（84箱）ごとの目録であるため全貌がわからず、また土蔵内に積み上げられていて必要史料の検索や抜き出しが困難であって、実際の内容についてほとんど世に知られないで来た。そのために、今回の整理作業は現存状況の確認調査から行うこととなったのであった。

確認と大谷大学搬入の後、5月末からは、嚴重な史料管理体制のもとで、研究所において一点一点についての史料調査を、カード式で累積し、整理していく作業に移った。当面、史料の実情に即した形でのカード記入方法を試行し、そこでの問題点をテーマとして6月6日に研究班全体会議を開き、調査・整理のマニュアル決定について検討した。そこでは、新目録の作成が必須であること、他の東本願寺史料群と共通する分類項目をたてることによって、将来的に史料総目録が作成できるように考えていくこと、が確認され、しばらくは調査カード作成の推進を中心に作業が進められていくこととなった。

カード記入要領はまさに試行錯誤の連続であったというべきで、旧目録に「一袋」、あるいは「一綴」として一括して一点とされている史料が、その袋や綴の中に実は数十点を含んでいたりと、袋の中に袋がまたあって、そこに何点かが入っていたりということが日常茶飯事という煩雑さを味わうことになった。それでも10か月に及ぶ努力の結果、親カード、子カード、孫カード、曾孫カードといった方式をとることによって、史料の現状を損わない形での整理法にたどり着くことができ、また絶対分類ともいべき東本願寺関係史料全体を包括し得る新分類法（内容分類）も考案し、それらのマニュアルによって調査カードのコンピューター入力も開始した。新目録作成への作業は、こうして整理作業と同時進行できるように

至ったといえよう。91年度末までの調査済カード数は段ボール15箱分3615枚となり、マニュアルの完成した92年度には、作業進捗が飛躍的となる見込みを抱くことができるまで軌道に乗って来た。

ただ、残念であるのは、91年度は、諸種の事情によってこうした調査の成果を公開する場がもてなかったことである。これは、次年度早々にも打開すべく企画しているところである。

## 2. 重要史料の翻刻・刊行

史料調査整理作業が進行するようになった7月段階において、いま一つの課題である重要史料の翻刻と刊行についての検討にはいった。それは7月18日の全体会議において企られ、園林文庫史料に限らず、本学図書館に寄託中の記録所文書、あるいは粟津家文書・稲波家文書などから広く重要史料を選定し、それらのうち必要とするものについて翻刻原稿化し、刊行しようという主旨が確認された。すぐに具体的作業としての重要史料選定にかり、①申物帳類②家臣系譜類③近世日記類④幕末維新日記類、という柱を立てて具体的史料名を列挙し、実際史料にあたって選定を進めた。そして、選定された史料について、8月9日にマイクロフィルム撮影および紙焼きの許可申請を大谷派宗務所に宛てて行ない、またすでにマイクロフィルムが図書館に蔵されている分については、夏期休暇中を使っての翻刻原稿化作業にはいった。

許可に基づいて10月15日には、新規分のマイクロフィルム撮影が正式発注できることになり、57,800コマ以上に及んだ撮影と16,874枚の写真焼付けが全て完了したのは12月7日であった。その間、順次翻刻原稿化作業担当者へと写真は手渡され、翻刻原稿が1000枚、2000枚と積み重なって年度末には3500枚に至った。これらの原稿については、史料集として公刊することを期していることであり、「申物帳編」「家臣系譜編」を皮切りとしていけるよう作業を急いでいる現状である。

東本願寺関係史料には未公開のものがあり、今回整理に着手した園林文庫もその内の一つである。こうして整理するという事は、東本願寺関係の近世近代史料として公開していかねばならないということを念頭に置いてのことであり、記録所文書や、その他の未公開史料についても併せて考えられねばならないことであると本研究班では認識している。史料の多くの所有者である大谷派においても基本認識を同じくすることから、関係部局において協議が進められ、一日も早く史料管理と公開の体制が整備されることを願ってやまない。そのために本研究が少しでも役立つならばと思うことである。最後に、本研究に寄せられた大谷派宗教所内の関係機関、大谷大学、および当研究所の御配意に深謝したい。

(木場明志記)

## 西藏文献研究

### 「大谷大学所蔵の北京版大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ 小川 一乗

西藏文献研究班は、大谷大学図書館が所蔵する数千点の貴重なチベット語文献資料のコレクションを整理・研究することを目的に組織され、発足以来「北京版西藏大蔵経」の勘同目録の作成、及び蔵外文献に含まれる稀観書の研究・出版を継続中である。1991年度の研究成果としては、勘同目録の編集作業の継続の他に、蔵外文献の中から、ジェットウン・シェーラブワンポの中観論書を公刊することができた。

当研究班は既に『大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書』というシリーズ名の下に下記のような四つの稀観書を出版している。

1. モンゴル人ゲンポキャブの『大唐西域記』のチベット語訳(抄訳)(1987年度)
2. ツァンナクバ著『知識論決択広註・善釈要集』(1988年度)
3. シェーラブジンバ著『中観学説決択集』(1989年度)
4. プンタクスンバ著『俱舍論語義解明・善説の陽光』(1990年度)

本年度は、第5冊目としてジェットウン・シェーラブワンポの著書である『入中論講釈意趣善明の難解部分を明らかにする書「意趣再明」』を、解題を付して出版した。著者のシェーラブワンポ(rJe btsun Shes rab dbang po, 1500-1586)に関しては本書以外にその著作が知られておらず、他の人の文献中にもあまり言及されることがないことから、目下の所、その存在をあまり知られていない。しかしながら本書は、セラ寺のチェーパ学堂の教科書として新たに制定されたジェツン・チューキゲツェンの『中観通解』(Toh. No. 6838)とともに、チェーパ学堂では中観学の重要な教科書として用いられてきた。同学堂では中観学に関しては、シェーラブワンポの方がより詳しいと言いつたされている。従って本書は、チェーパ学堂の中観思想の理解の程度を伝えるものであることはもとより、ひいては同学堂が所蔵するゲルク派の中観思想理解の程を示すものと言うこともできる。そういう意味で、チベットにおける中観思想の研究を理解しようとするれば本書を無視することはできない。

ゲルク派の学問寺では通常、論理学と般若学と中観学と律学と俱舍学とが主要な学問とされている。その中で、中観学の学習の中心をなすのは、主としてチャンドラキールティの『入中論』の研究である。『入中論』にはツォンカバによる解説書『意趣善明』のあることはよ

く知られているが、チベットではゲルク派の学僧たちがこの書に対して更に多くの注釈書を著わしている。各学舎ではこれらの注釈書のどれかを教科書として採用するのである。チェンパ学舎ではチェンキゲーツェンの著書が主要な教科書として採用され、それ以外に五種の教科書が併用された。シェラブワンボの『意趣再明』はその一つである。本書は本学 (Otani No. 13957) 以外には東北大学にも所蔵されている (Toh. No. 6840)。但し、本学のもので dpe yig という書体で記された写本であるのに対して、東北大学のものでは版本 (セルチェン版) である。本書は縦10センチ横59センチの厚紙にきれいに記されている。罫線は朱色で引かれているが、本文の所々も同色の文字で記されている。例えばツオンカパの『意趣善明』やチャンドラキールティの『入中論註』などは、原則として朱色で記されている。

本書の刊行が中観学の研究の一助になれば幸いである。尚、本叢書の既刊書については、一般書店の他、当研究所においても入手可能なので、問い合わせを頂きたい。

(小谷信千代記)

## 大蔵経学術用語研究

### 『大正新脩大蔵経』毘曇部関係典籍における学術用語の研究

研究員・チーフ 鍵主 良敬

本指定研究は、一昨年度 (平成元年度) より開始されたものであり、当初から研究期間については3年間を予定していた。従って本年度は本指定研究の最終年度にあたるわけである。本指定研究に関する昨年度までの研究経過については、それぞれ『研究所報』No. 25及び同No. 27に要点をまとめて記しておいたのをご参照していただきたい。

本年度は、昨年度までの研究成果をふまえて、それによって明らかとなったいくつかの問題をどのような形で具体的に改めていくのか、その方法的な検討を中心として研究が進められた。即ち、昨年度以前の研究成果として『研究所報』No. 27に述べたような『大正新脩大蔵経索引毘曇部下』の本編が有している様々な問題は、その問題の持つ性格の上からどのような訂正あるいは改善を加えるのが最良であるのか、この点に焦点を絞って問題の性格ごとに各々考察が加えられていったわけである。言うまでもないことであるが、本指定研究は、当初からのその研究成果を『大正新脩大蔵経索引毘曇部下』の再版という形で表現することを視野に入れたものであった。従ってこれまでに明らかとなった誤りについて

は当然のことながら訂正しなければならない。しかしながら、編集方針の違いから生じたと考えられる諸問題に関しては、必ずしも誤りであるとするわけにはいかないのでこれらをどの程度改善すべきであるかについては大いに議論を必要とした。つまり、今日の整理された視点からみて不統一と思われる諸点を改善しようとして、それを現行の索引のように改めようとするれば、それは結果的に大幅な組版の変更を必要とすることになるわけである。このことは索引再版に関する相当額のコストアップに直結する。従って出版を請け負う出版社にとってはあまり歓迎したくない研究成果であるということになるのである。このような事情も含みながら、それぞれの問題点について最少の負担で最大の効果をあげるための具体的な検討が為されていったわけである。

そのようにして索引の本編についての様々な問題を一通り検討し終えた後、本索引を構成する他の部分についての点検作業に入ってしまった。本編以外に索引を構成する他の部分があって、それらについても検討が加えられなければならないということについては、多少とまどいを禁じざるを得ないむきもあるだろうからおくればせながら若干説明を加えておこう。

『大正新脩大蔵経索引』は、一応索引という名称を持っているが、一般的な意味での索引とは大いに内容を異にしている。というのは、本索引はもともと本文中の用語の検索のためにだけ造られたものではないからである。仮にそのようなものをめざるのであれば可能な限り多くの用語を取り挙げ、紙面の全てを使ってより多くの用語の所在を知らせるものとすべきであろう。ところが本索引では用語を数の面からも内容の面からも細かく検討を加えて厳選し、その用語が大蔵経全体の中でどのような範疇に属するものであるのかということまでも統一的に整理して見出し語として提供しているのである。このことが何を意味するのかと言えば、本索引で見出し語となっている用語は、当該文献のしかるべき文脈の中で特に重要な役割りを持つものであり、その役割りの意味するところを大蔵経全体という視野の中である程度まで利用者に知らせることができるとのことである。このような点から『大正新脩大蔵経索引』は、当該文献を学問的に研究した結果を索引という形式で表現したものであって、入力された情報に特定の指示を与えることによって機械的に造り出すことのできる索引とは大いに内容を異にしているわけである。

このような理由によって、『大正新脩大蔵経索引』は、索引本編の他にも様々な利用の為の便宜が設けられているのである。若干傍論になるがこの際敢えて紹介しておこう。本索引は次に示すようないくつかの重要な部分によって全体が成り立っている。

1. 収録典籍解題
2. 凡例

3. 音次索引
4. 分類項目別索引
5. 検字索引

これまで本稿で索引本編と称してきたのは、この中の「音次索引」のことである。「収録典籍解題」とは、索引が依りどころとしている『大正新脩大藏經索引』の当該文献の解題である。「凡例」は本索引の編集及び表記に関する約束事を示したものである。「分類項目別索引」とは「音次索引」に収録された一々の用語について、それらを範疇別に分類し、それぞれの中を五十音順に並べたものである。これによって当該文献中に性質的に共通するどのような用語が含まれているかを一覧することができる。「検字索引」とは、音次索引に収録された用語の

首字を字画と四角號碼とによって検索できるようにしたものである。以上のように本索引には索引本編の他に、本書を利用して研究を進めていくための様々な配慮が為されているのである。これらの諸部分についても今日的な視点から様々な検討が加えられ、いくつかの問題点が指摘された。そして吟味の結果、それらはいずれも索引本編の有する諸問題に比較すれば容易に訂正・改善することが可能であるとの結論を得た。

こうして三年間に亘る一連の点検作業を終了した。その結果は、『大正新脩大藏經索引毘曇部下』の第二版として近い将来に出版される予定である。

(織田顕祐記)

## ハーバード大学の仏教研究

研究員・専任講師    ロバート・F・ローズ

1987年9月より1990年6月までハーバード大学東アジア言語文化学科のドクター・コースに在籍して、3年間ボストンで生活した。以下の報告はそのときの経験にもとづくものである。すでに『仏教教学セミナー』49号に「ハーバード大学の仏教学——学生の視点から——」を寄稿したが、その中では、この大学のドクター・プログラムの学生の立場から、日本とアメリカの大学教育方法の違いなどに留意しつつ、ハーバード大学の仏教学について述べた。しかしそこでは筆の及ばなかった点が多々あったので、その補足の意味も含めて、再びハーバードの仏教学についてレポートすることにした。

### I

まずハーバード大学の仏教学の歴史について述べておきたい。この大学で仏教学研究が開始されたのは、1880年代に入ってからのことであった。当時、欧米では、インドとその文化に対し深い興味と関心が沸きあがっており、仏教に対しても研究者の目が向けられるようになりつつあった。そのような状況の中、ハーバード大学に関係の深い人々のあいだで本格的に仏教と取り組んだのがヘンリー・クラーク・ウォーレン (Henry Clark Warren 1854-1899) であった。ボストンの裕福な事業家の家に生まれたウォーレンは、3才のとき椅子から転落し、脊柱を骨折した結果、一生身体障害者として過すことになった。しかしその身体の不自由を克服し、ハーバード大学に入学した。卒業後、ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に進み、当時同大学の教授であったチャールズ・ランマン教授について、サンクスリットを学んだ。ウォーレンはサンクスリットの他にも、科学に深い感心を懐くようになり、化学実験室に籠ることもしばしばであったが、大学院終了後の1884年の夏、イギリス旅行の際、パーリ研究の大家、リス・ディヴィズと会見し、以降パーリ仏典の研究に専念することとなった。

1891年には、ハーバード大学のあるケンブリッジ市にもどり、仏典を研究する日々をおくるようになった。また、同年に刊行が始った、ハーバード・オリエンタル・シリーズにも深くかかわった。このシリーズは、インド学関係のテキストや翻訳を中心に、多くの研究書を出版し、アメリカのインド学・仏教学の発展に大きく貢献し

たが、その資金はウォーレン自身が負担した。このシリーズの第一冊目は、オランダのライデン大学のH・ケルンの校訂した『ジャータカマラ』(インドの宮廷詩人のアールヤシューラ著の仏伝)のサンクスリットテキストであった。その他、このシリーズの仏教学関係の代表的なものとして、ウォーレンのパーリ仏典から重要な部分を抜粋・英訳した *Buddhism in Translation* (1896) を初め、ユージーン・バーリングゲームによるダンマパダ注釈書 *Dhammapada-atthakathā* の英訳 *Buddhist Legends* (1921) やチャルマーズ卿によるスッタ・ニパータの英訳 *The Buddha's Teachings* (1932) などがある。

ウォーレンは45才という若さで世を去ったが、晩年に取り組んでいた *Visuddhimagga* のテキスト校訂及び英訳の作業は、ついに完成されることはなかった。ランマンの回想によると(注①)、普通の机に向ってすわるのでできなかったウォーレンは、両脇から二本の松葉杖でささえながら、高くつくった机にもたれかかるような姿勢で勉強していたようである。このように不自由な身体にもかかわらず研究に没頭する彼の姿は、周囲の人を感動させずにはおかなかった。

ウォーレンのように仏教を専門とはしなかったが、長年ハーバードのサンクスリットの教授であったチャールズ・ランマン (Charles Lanman 1850-1941) も、この大学の仏教研究の発展に大きく貢献した一人である。ランマンはイェール大学でウィリアム・ホイットニー(名高いサンクスリット文法書の著者)に師事し、サンクスリット語を学び、1873年に PhD を得た。その後ドイツに渡り、語学の研究を深め、帰国後、ジョンズ・ホプキンス大学で数年間教鞭を取った。(ランマンがウォーレンにサンクスリットを教えたのはこのころであった。) 1880年からはハーバードのサンクスリットの教授として活躍した。1888年には、今日でも広く使われている『サンクスリット・リーダー』を出版し、その三年後には、先のハーバード・オリエンタル・シリーズの編集にも従事した。

ランマン退任後、ダニエル・インガルス (Daniel Ingalls) がサンクスリット学科の中心として活躍した。インガルス教授は、広くインドの文学・思想に通じており、当時のサンクスリット研究の第一人者であった。その門下からは、永富正俊教授やロバート・サーマン教授

など、今日のアメリカの仏教学を支える研究者が多く輩出している。

以上のようにハーバードでは、1880年代から仏教にもふれる授業が行なわれていた。しかし1957年に至って初めて、仏教学専門の教授が任命されることになった。このポストには、インガルス教授のもとで学び、仏教論理学の論書である *Pramāṇavārttika* の研究で学位を得た永富正俊教授が就任して、今日に至っている。このポストは、サンスクリット・インド学科と、東アジア言語文化学科の両学科にまたがる兼任であるため、永富教授は仏教概論の講義はもとより、サンスクリット学科の方ではサンスクリット、パーリ、チベット仏典の講読などを担当し、東アジア学科では、中国・日本仏教の指導を行っている。つまり永富教授は長年のあいだ、ハーバートの仏教学を一手に引き受けてきたのである。

さて、これまで述べてきた諸教授は皆、仏教の教義を思想的に把握しようと努めている文献学者であるといつてよい。しかしこのような伝統的仏教学者とは別に、他の方法論を用いて仏教を研究している学者もいる。戦後まもなくのころ、有名な中国仏教通史の *Buddhism in China* を著わしたケネス・チェン (Kenneth Ch'en) 教授は、エンゲルズ教授のもとで PhD を得てから、数年間、この大学で教鞭を取っていた。チェン教授は後に他の大学に移ることになったが、その後ホルムズ・ウェルチ (Holmes Welch) 教授が中国仏教史に取り組むようになった。ウェルチ教授は特に近代の中国仏教に関心を持ち、長年の研究成果をその有名な三部作 — *The Practice of Chinese Buddhism, 1900-1950* (1967), *The Buddhist Revival in China* (1968), *Buddhism under Mao* (1972) — にしてまとめた。これらの研究を著述するにあたり、近代の中国仏教に関する資料をふんだんに用いていると共に、革命後、香港や台湾に亡命してきた中国僧侶を訪ねまわりアンケートなどを通じて得た資料も多く用いている。このように文献研究とフィールド・ワークを共に駆使した研究方法は今日広く用いられているが、当時としては極めて斬新で、注目の的となった。

このような、ウェルチ教授などによって開拓された、フィールド・ワークなどを用いる仏教学的方法論は、アメリカの仏教研究ではすでに一般化している。ハーバードの人類学のスタンレー・タンバイア (Stanley Tambiah) 教授は、そのような方法で、東南アジアの民間仏教について研究を行っている。タンバイア教授は、特にタイにおける仏教と国家権力との関係、あるいは仏教と土着の民間宗教との関わりなどについて、精力的に研究をおし進めているが、この方面の主な著作は次の通りである。

1. *Buddhism and the Spirit Cults of Northeast Thailand* (1970)

2. *World Conquerer and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background* (1976)
3. *The Buddhist Saints of the Forest and the Cult of the Amulets: A Study of Charisma, Hagiography, Sectarianism and Millennial Buddhism* (1984)
4. *The Buddhist Conception of Universal King and its Manifestation in South and Southeast Asia* (1987)

また教授は人類学全般にわたる課題や方法論についても多数の論文・著作がある。たとえば、*A Performative Approach to Ritual* (1981) では宗教儀礼一般について論じており、*Sri Lanka: Ethnic Fratricide and the Dismantling of Democracy* では、スリランカの内戦も取り上げている。また教授の主な論文を集めた *Culture, Thought and Social Action: An Anthropological Perspective* は、高く評価されている。

この他、美術学科 (Department of Fine Arts) では、日本美術史専門のジョン・ローセンフィールド (John Rosenfield) 教授が、日本の仏教美術に関連のある授業を行っており、この大学の仏教研究の中で重要な役割をはたしている。

このように、ハーバード大学では、長い仏教研究の伝統をベースに、各方面から、さまざまな方法論にもとづいて、仏教についての研究が行なわれている。

## II

以上、ハーバード大学の仏教学の歴史を概説し、今日仏教研究に携わっている教授陣を簡単に紹介したが、次にこの大学の仏教学に関連のあるドクター・コースのプログラムのいくつかについて述べてみたい。ここであえて仏教学に関連のあると書いたのは、実はハーバードでは独立した仏教学科を持たないからである。これは、アメリカのどの大学でも、極めて特殊な例をのぞいて、同様である。そこで、ハーバードで仏教について学ぶドクター課程の学生のほとんどは、次の三学科に所属することとなる。

1. 宗教学プログラム (Study of Religion)
2. サンスクリット・インド学科 (Sanskrit and Indian Studies)
3. 東アジア言語文化学科 (East Asian Languages and Civilizations)

いうまでもなく、所属する学科によって、仏教を研究する方法が異なってくる。

まず宗教学プログラムでは、(a)世界の主要な宗教 (仏教、キリスト教、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教、儒教など) や、(b)いくつかの地域的時代的に限定された諸宗教 (古代中近東、古代ギリシャ・ローマ、近代西洋、中国、日本、インドなどの諸宗教) を研究対象としてい

る。そしてこれらの宗教を研究するベースとして、このプログラムの学生は、宗教学の基礎的方法論を学ぶことが要求される。そのため、ドクター・コースの学生はすべて、宗教学の方法論についての特殊セミナーを二年間にわたって受講しなければならない。このような基礎知識を得た上で、次の三の研究方法（オプション）の一つに沿って、個々の宗教について勉強することになる。

その第一のオプションは、先に挙げた(a)及び(b)にみられる宗教や地域の中から二つ選択し、それらを比較宗教学の立場から研究してゆく方法である。仏教とキリスト教の比較研究などは、このオプションの中で行なわれる。第二のオプションは、一つの宗教を選び、それについて歴史的思想的に研究してゆく方法である。第三のオプションは、宗教学と他の学問分野（人類学、美術、文学、哲学、心理学、法律、病理学、倫理学など）との関わりあいの上から、宗教の性格やその社会的文化的役割について研究してゆく方法である。このように、宗教学プログラムにおいては、世界各地の宗教を勉強するにあたって、様々な方法が用いられているが、このプログラムで仏教を学ぼうとすれば、必ず宗教学の方法論にのっとって研究してゆくことが大前提となっている。

次にサンスクリット・インド学科でも、仏教が盛んに研究されている。現在この学科では次の九分野についても授業が設けられている。(1)ヴェータ、(2)サンスクリット語、(3)サンスクリット文学、(4)パーリ・プラクリット語、(5)パーリ・プラクリット文学、(6)チベット学、(7)ヒンズー哲学、(8)仏教学、(9)古代インド史がそれである。このリストから窺えるように、この学科の中で、仏教は大きな位置を占めている。先に見たように、この学科は常にハーバードの仏教学をリードしてきたが、南アジアの諸言語の読解力を重視する文献的アプローチを基礎に据えた仏教研究が今日でも続けられている。

また、東アジア言語文化学科では、中国語や日本語などの東洋の諸言語の学習と、東アジアの歴史、文学、宗教などの研究が中心になる。したがって、この学科で仏教を学ぶとき、東アジアの文化の一要素としてそれを研究することになる。この学科における仏教学研究については、すでに前記の「ハーバード大学の仏教学」に報告しているので、それを参照していただければ幸いである。

以上述べてきたように、ハーバード大学では、それぞれの学科によって、様々な方法を用いて、仏教が研究されている。このように一つの大学で、多種多様な方面から仏教を究明しようとしていることは大変興味深い。このような状況の中、自分とは異った学科で仏教を学んでいる教授や学生と接して、日頃考えていた問題に新しい視点を与えられることがしばしばある。このような自由なアイデアの交換こそ、フレッシュでダイナミックなアメリカの仏教学の原動力となっているといえるであろう。

最後に、ハーバード大学の仏教研究の歩みを具体的に示す資料として、戦後この大学に提出された仏教関係のドクター論文を、学科別に、付記しておきたい。残念ながら、大学図書館のコンピューター化にともない、1980年以後提出された論文は図書館には保管されておらず、過去10年間のドクター論文を完全にリストアップするのは意外に困難である。不備なものではあるが、このリストが今後の国際仏教研究班の研究に役立てれば幸いである。

#### East Asian Languages and Civilizations

- 1944 Yi-liang Chou. *Tantrism in China.*
- 1965 Stanley Weinstein. *The Kanjin Kakumusho.*
- 1971 Leo M. Pruden. *The Risshu-koyo: An Annotated Translation.*
- 1972 Alexander Berzin. LAM. RIM. MAN. NGAG. *A Standard Intermediate Level Textbook of the Graded Course to Enlightenment. Selected Materials from the Indo-Tibetan Mahayana Buddhist Textual and Oral Traditions (Sections 1-4B2B).*
- 1973 James H. Sanford. *Ikkyu Sojun: A Zen Monk of Fifteenth Century Japan.*
- 1975 Thomas F. Cleary. *Sayings and Doings of Pai-chang Huai-hai, Ch'an Master of Great Wisdom.*
- Martin Collcutt. *The Zen Monastic Institution in Medieval Japan.*
- 1978 Robert Mintzer. *Jojin Ajari no Haha Shu: Maternal Love in the Eleventh Century—An Enduring Testament.*
- 1981 Peter Gregory. *Tsung-mi's Inquiry into the Origin of Man: A Study of Chinese Buddhist Hermeneutics.*
- Andrew Kopecki. *Cultural Adaptation in the Chinese Acceptance of Buddhism: Selections from the Hung-ming chi.*
- Zenryu Shirakawa. *The Esoterization of Tendai in Early Heian Japan.*

#### Sanskrit and Indian Studies

- 1946 Kenneth Kuan-sheng Ch'en. *A Study of the Svagata Story in the Divyavadāna in its Sanskrit, Pali, Tibetan and Chinese Versions.*
- 1957 Masatoshi Nagatomi. *A Study of Dharmakīrti's Pramāṇavārttika: An English Translation and Annotations of the Pramāṇavārt-*

- tika. Book I.
- 1972 Robert A. F. Thurman. Golden Speech: A Portrait of Sumati Kirti, Presenting English Translations of the Eloquence-Essence, The Smaller (complete) and the Greater (Chapters I-III).
- 1983 Bruce C. Hall. Vasubandhu on Aggregates, Spheres and Components : being Chapter One of the Abhidharma-kośa.
- Study of Religion
- 1961 David F. Casey. Aspects of Sūnyatā-Absolute of Nāgārjuna of Second Century AD Andhra.
- 1963 Alfred Bloom. Shinran: His Life and Thought.
- 1972 John R. Carter. Dhamma: Western Academic and Sinhalese Buddhist Interpretations. A Study of a Religious Concept.
- Gilbert Johnston. Kiyozawa Manshi's Buddhist Faith and Its Relation to Modern Japanese Society.
- Minor L. Rogers. Rennyō Shonin, 1415-1499. Transformation in Shin Buddhist Piety.
- 1975 Whalen Lai. The Awakening of Faith in Mahayana (Ta-ch'eng ch'i-hsin lun): A Study of the Unfolding of a Sinitic Mahayana Motif.
- 1977 Hee Sung Keel. Chinul, the Founder of Korean Son (Zen) Tradition.
- 1978 Douglas Graeme MacQueen. A Study of the Sramanyaphala Sutra.
- Miriam Lindsay Levering. Ch'an Enlightenment for Laymen: Ta-hui and the New Religious Culture of the Sung.
- Joseph F. Roccasalvo. The Anatta Doctrine: A Textual and Contextual Interpretation.
- William Neville Smith. Understanding of Karma in Early Buddhism.
- 1979 Kuen-wei Lu Sundararajan. Chinese Stories of Karma and Transmigration.
- 1980 Malcolm David Eckel. A Question of Nihilism: Bhāvaviveka's Response to the Fundamental Problems of Mādhyamika Philosophy.
- 1985 John I. Gaulde. Anti-Buddhist Polemic in Fourteenth and Fifteenth Century Korea.
- 1986 Tomoaki Tsuchida. Mind and Reality: A Study of the Shoulengyanjing.
- 1988 William Edward Deal. Ascetics, Aristocrats and the Lotus Sutra: The Construction of the Buddhist Universe in Eleventh Century Japan.
- 1989 Cuong Tu' Nguyn. Sthiramati's Interpretation of Buddhology and Soteriology.
- Others
- 1980 Ruth E. Ten Grotenhuis-Flemings. The Revival of the Taima Mandala in Medieval Japan. (Fine Art)
- 1986 Jan Nattier. The Chandragarbha-sutra in Central and East Asia. (Inner Asian and Altaic Studies)
- 注
- ① William Peiris, *The Western Contribution to Buddhism* (Delhi : Motilal Banarsidass, 1973), 248.



## 「アメリカ宗教学会」参加報告

研究員・専任講師 加来 雄之

1991年度アメリカ宗教学会大会 (The 1991 Annual Meeting of the American Academy of Religion 以下 AAR と略す)

日程：1991年11月23日(土)より11月26日(火)まで

場所：アメリカ合衆国ミズリー州カンサスシティー  
アリスプラザホテル、バートル・ホール

参加研究員

宮下晴輝 (専任講師)

加来雄之 (専任講師)

11月22日、寒風吹き荒ぶカンサスシティーの空港に両名は下り立った。飛行機の欠航などのため、予定していた時刻よりも随分と到着が遅れ、空港を出たときにはすでに真夜中であった。膚を切るような風と時折吹きつける雪の中でタクシーを待つことほぼ1時間、ホテルについたときには、すでに深夜2時をまわっていた。

AAR は、研究班としてははじめての参加であり、また直前に派遣が決定したこともあり、学会についての詳しい情報はほとんどもちあわせていなかった。ロバート・F・ローズ氏より多少の情報をいただいていたのだが、実際にその規模の大きさに接してみると、日本の箱庭的な学会に親しんだ我々にとっては驚きの連続であった。

さて AAR という学会は、1909年、宗教学分野での社会的専門的な提携を目的として設立された。この学会はこの種の宗教学会としてはアメリカでもっとも大規模なものである。今年度の AAR 大会は、アメリカ合衆国ミズリー州カンサスシティーにおいて11月23日(土)より26日(火)まで5日間、アリスプラザホテル (The Allis Plaza Hotel) とバートル・ホール (Bartle Holl) を会場として、ほとんどそれらの会場を貸切るようなかたちで開催された。AAR と SBL (The Society of Biblical Literature) との合同の大会であるが、AAR だけでも170以上にわたる部会が設けられている。その参加者は、アメリカのあらゆる宗教の分野に関わる研究者が集るといっても過言ではない。また本 (1991) 年度より仏教部会が新設され、国際仏教研究班が AAR へ研究員を派遣することを決定した主な理由は、この部会の情報を入手するためであった。

この学会には、アメリカにおける著名な宗教学者が多

く参加する。その中で、レスリー・カワムラ教授、マラルド教授やキーナン教授など、かつて当研究所の研究会で講義をしていただいた仏教研究者たちにもお会いすることができた。

またこの学会の特徴は宗教関係の研究職を志しているものための多くの面接会場が設けられており、この機会を利用するためにアメリカ国内の若い研究者が集ってくることである。本大会では、700人の志願者が面接を受けたことが報告されている。その中には、かつて大谷大学の研修員として学んでいたウイスコンシン大学からの留学生たち、A. ノートン氏や W. ワルドロン氏などの姿も見られた。彼らと旧交を暖めることができ、その中でアメリカにおける学者の動向や研究の状況などさまざまな情報を得ることができたことは学会参加の大きな収穫の一つであったように思う。

さらに学会は出版業界と提携もしくは後援を受けているようである。多くの出版社による展示即売会が学会の一貫として催されており、会場となったバートル・ホールには、90近い出版社が展示に参加していた。我々も資料収集のために何度かおもむいたが、いつもたいへんな盛況であった。

また余談であるが、大会の運営で機能的であると感じたのは、すべての発表が本部で録音されており、その録音テープが受け付けで販売されていることである。発表の30分も後であれば、そのテープを\$8で手に取ることができるし、大会に参加できない場合でも申し込みれば郵送してもらうことができる。

さて、今回の大会について簡単な報告をしておきたい。到着した23日、午前10時前、時差ボケと寝不足の両名は、ホテルより発表会場バートル・ホールに向かうため、多くのやはり学会に参加するための学者たちと共に、学会が用意したバスに乗り込んだ。

たどり着いた会場は、想像していたよりもはるかに大きく、受け付けに手間どり、残念ながら正午に参加を予定していた開会式には出席できなかった。後日の報告によると SBL を合せると5,300人以上が受け付けを行ったということである。

さて、受け付けをすませるとすぐに予定していた発表会場におもむいた。多くのアメリカの学会がそうであるようにプログラムに従って厳格に進行されていく。時間

延長などという日本の学会で見られる光景はまったく見られない。質疑応答も激しいやりとりが交わされる。

AARでは、宗教に関係するありとあらゆる分野の研究発表が行われる。主な部会 (Program units) だけでも、

Academic Teaching and Study of Religion

Arts, Literature, and Religion

Buddhism

Comparative Studies in Religion

Ethics

History of Christianity

History of Judaism

North American Religion

Philosophy of Religion

Religion and Social Sciences

Religion in South Asia

Study of Islam

Theology and Religious Reflection

Women and Religion

の14分野がある。またそれ以外にも、Groupsには、“African Religion”をはじめとして30、Seminarには、“Baha'i Studies”など7、Consultationには8など、45の分野にわたって特殊なもしくは新しく起こってきた問題に対応するためのプログラムが設定されている。

研究班が目目していた今年度より新設された仏教部会 (Buddhism Section) のプログラムは以下の通りである。

11/23 1:00—3:30

Foundational Philosophies: Ālayavijñāna and Tathāgatagarbha in India, China, and Tibet

11/23 3:45—6:15

Topics in Buddhist Studies

11/24 9:00—11:30

Buddhism and Orientalism at the Turn of the Century

11/24 3:45—4:45

The Buddhism Section of the AAR: Self-Reflection and Open Discussion

11/24 5:45—6:15

Business Meeting

11/25 9:00—11:30

Genre and Canon in Buddhist Literature

11/25 3:45—6:15

Deity and Deification in the Tantras

我々二名の目的は、国際仏教研究班の課題に従い、とくにこの仏教部会を中心に参加し、アメリカにおける仏教学研究の最新の動向についての情報を入手すること、また国際的な学会がどのように運営されているかを調査することにあった。

またあわせて宮下研究員は、今後の学術的交流に資するため、できるだけ仏教関係の著名な学者と接触するこ

とに努め、加来研究員はキリスト教と真宗の対話という課題から、仏教関係以外にも西田哲学の部会、キリスト関係の部会に参加し、とくにその分野では著名なジョン・コブ博士と接触することにした。

ただ、このような計画を、両名は、大会プログラムをもとにしながらアメリカに向かう空の上で泥縄式に立てたのである。正直に告白すると、予定していたすべての発表を聞くことは体力的にも語学的にもそうとう厳しく、参加する部会を予定していたよりも減らさざるをえなかった。まさに浮雲の上に立てた計画は転覆を免れることができなかったのである。ともかく両名が参聴することができた部会は以下の通りである。

11/23 1:00—3:30

Buddhism Section

Foundational Philosophies: Theme: Ālayavijñāna and Tathāgatagarbha in India, China, and Tibet

11/23 3:45—6:15

Buddhism Section

Theme: Topics in Buddhist Studies

11/24 9:00—11:30

Philosophy of Religion Section

Theme: Religious Verification: A Comparative Analysis

11/24 1:00—3:30

Process Thought, the Nishida School of Buddhist Philosophy in Comparative Perspective Seminar

Theme: Experience and Language Revisited: Wrap-up Session

11/24 3:45—6:15

Buddhism Section

Theme: The Buddhism Section of the AAR: Self-Reflection and Open Discussion

11/25 9:00—11:30

Buddhism Section

Theme: Genre and Canon in Buddhist Literature

今回の1992年度大会は11月21日から24日までカリフォルニア州サンフランシスコで開催され、研究班からも研究員を派遣することが決定している。また1993年はワシントンDC、1994年はシカゴで開催されることが決定している。

# 「宗教與文化国際学術研討会」参加報告

研究員・専任講師 桂華 淳祥

国際仏教研究班の活動の一環として、台湾で開かれた「宗教與文化学術研討会」に参加する機会を得たのでその状況について簡単に報告しておきたい。

会議は1992年3月27・28両日、輔仁大学（台北市に隣接する新莊市内）において開催された。日程・報告者・テーマは次の通り。

## 第1日 基調講演 「宗教與文化」

李振英 輔仁大学校長

### 第1次会議「宗教與文化發展」

張春申 輔仁大学神学院教授

「天主教会・社会發展・基本需要」

王慶中 輔仁大学副教授

### 第2次会議「仏教與倫理道德」

黄依妹（慧嚴法師）

中華仏学研究所研究員

中興大学副教授

### 第3次会議「仏教與中国文学 兼比較中国文学在仏教伝入前後之異同」

李志夫 中国文化大学教授

### 第4次会議「宗教與中国文化」

項退結 政治大学教授

## 第2日

### 第5次会議「仏教圖像中的想像與法性」

潘小雪 輔仁大学講師

### 第6次会議「仏教與中国芸術」

陳清香 中国文化大学教授

### 第7次会議「Contemporary Perspectives on the Relationship between Science and Religion」

柏殿宏 輔仁大学教授

### 第8次会議「AN EVALUATION OF GALILEO'S CASE」

Juan Casanovas 国際天文学联合会委員

### 第9次会議「MATTEO RICCI'S 利瑪竇在中国的評估」

Juan Casanovas 国際天文学联合会委員

会議は上記のように九つのパネルに分けられ、それぞれ約一時間三十分を予定して進められた。報告者による発表（約四十分）に続き参加者からの意見や質問が出さ

れる。落ちついた雰囲気の中、しかし討論には熱がこもり、予定時間を超過することもしばしば。使用言語は中国語（1～6会議）であるが、英語の発表（7～9会議）には必要に応じて通訳もなされた。参加者は、名簿によれば百名あまり。大学に所属する研究者が約七割で、他は各仏学研究所やキリスト教関係機関に所属する研究者である。勿論開催地台湾の研究者が最も多いが、外国からの参加者も十数人見受けられた。もっともその多くはキリスト教関係で台湾在住の人（日本人一人を含む）であり、日本からの参加は小生だけであった。また名簿には記載されていない参加者も多数あったようである。受付担当者の言によれば、開催校をはじめとする各大学の学生と一般の信者諸氏であるとのこと。

テーマからもわかるように会議において扱われたものは主に仏教とキリスト教である。内容は宗教教義と道德との関係、芸術・文学との関係、社会發展との関係など広い範囲にわたり、どの報告もそれぞれ宗教のはたした役割の大きさを指摘していた。なかにはいささか過大評価や誇大表現ではないかと思われる部分もあったが、それは裏を返せば現在の台湾の宗教研究界の置かれている立場の反映とも受け取れよう。

台湾では現在まで、教育政策上、大学に仏教をはじめ宗教に関する学科を設置することは許されておらず、わずかながら哲学科・歴史学科に係る授業（キリスト教史・仏教史・インド哲学など）が開講されているだけで、各宗教に関する教育・研究はそれぞれの教団によって運営・維持されている機関（仏学院・仏学研究所・神学院など）で行われてきた。仏学研究所についていえば、その設立は政府から許可されてはいるものの学位授与資格は与えられていないので、仏教研究を志すものにとって将来の活躍の道途に発展性のないことから、その機能を十分に果たしているとはいええない。現在それに対する方策として優秀な人材を海外に留学させているという。

ところが最近では、經濟の發展にともなって社会秩序が悪くなってきているということで、倫理道德感の欠如が問題視されはじめ、宗教教育の在り方が見直されつつある。聞くところによると、今年9月から大学に宗教学科の開設が認められるという。これは、行政当局から常に抑制されてきた宗教の教育研究が少しづつながら緩和されはじめている証拠でもあろう。その意味において、

本会議が開催され、従来あまり交流のなかった教団側の研究者と大学の研究者が一同に会してシンポジウムを行ったことは、これからの台湾宗教界の教育研究活動に新たな方向性を示すものとして意義深いものであったといえよう。今後の研究成果に期待したい。

このように台湾における仏教研究の環境は日本とは大きく異なるため、ただちに仏教研究の関係大学は挙げられないが、前述したように仏教界のなかにいくつかの研究所や仏学院が設立されている。それら諸機関との交流や、今回の会議に参加された先生方との交渉から次第に当該研究の状況が把握できると思われる。

また会議とは別に多くの人々と意見交換をする機会に恵まれたが、その際どの研究者も日本の研究動向にことのほか関心を寄せられていることを実感した。先方の状況把握もさることながら、一方でその要望に応えていくことも我々にとって怠ってはならない重要な課題であり、それが研究活動の従来の枠組みを越えた自由な交流を促進させる手掛りともなろう。

なお台湾の仏教研究の体制については、黄依妹師「台湾における仏教学研究の状況」(『研究所報』No. 27)を参照されたい。

# 「タミール仏教に関する国際セミナー」参加報告

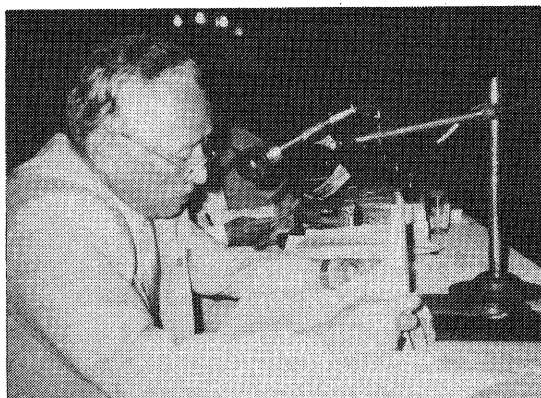
教授 藤島 建樹

「タミール仏教に関する国際セミナー」と名乗るこの学会は、南インドのタミール・ナドゥ州の州都マドラスにある「アジア文化研究所」（彦坂 周所長）と、インド学研究で知られる北欧スウェーデンのウプサラ大学宗教学部の共催で企画されたもので、目的とするところは、今やヒンズー教やシンハリ仏教に追われ消滅したといわれるタミール仏教を乏しい材料から多面的に追求し、それがアジア仏教・アジア文化の一つの根源をなしていることを解明しようとするものである。

学会は5月25日から31日まで7日間にわたって、マドラス南郊のリゾート地 V. G. P. ゴールデンビーチを会場として開催された。この学会の開催を記念して作られた大仏の開眼法要にはじまる開会式で幕を開けた学会は、研究発表3日半と、仏教遺跡を訪ねるバスでの研究旅行、マドラス博物館・アジア文化研究所の参観・見学に、地元知名人士も参加した、閉会式典に至るまで、きわめて充実した日程が滞りなく実行された。

研究発表では欧米3名、日本人4名を含む30余名の発表と他の参加者が加わっての熱心な討論が展開された。タミール仏教の研究は彦坂所長の提唱によって、その緒についたばかりである。従って発表も歴史学・文学・思想史・考古学・民俗学など多分野に亘り、焦点が定まらない感否めないが、ヒンズー文化の強いインド学界にタミール仏教の存在と、仏教研究の必要性を提起したことは今後の研究発展へのステップとして重要であろう。


なお、筆者は、13世紀における中国文献に表わされた南インドの交流を紹介し、中国における南海航路の発展と、中国がスリランカと同様にこの時期でも南インドを仏教国と認識していた状況を発表した。



仏教遺跡を訪ねるバス・ツアーは、巨大なヒンズー寺院の一部にかつて仏教寺院の遺跡がとり込まれている実態などを見聞した。ヒンズー文化の中で埋没しつつある仏教遺跡に対し、学術的視野での発掘調査・保存・研究の早急な実施が必要であること確認したことである。

以上の如き学会に参加し、とくに印象づけられたのは、アジア文化研究所長・彦坂 周氏の情熱と行動力である。仏教不毛の地といわれたタミールに独力で仏教を対象とする研究所を設立して10年。精力的な研究と出版活動で実績を積み、インド学界での評価を得て国際学会を主催するに至ったのである。氏の夢はさらに拡がり本格的な研究施設を建設し、アジアにおける仏教を中心とする文化研究の一大センターにすることである。

本学 OB でもある氏の努力に対し、大谷大学ことに研究所が緊密な連携をもって、物心両面での援助や人材の交流で協力を惜まないことをねがって報告とする。



International Seminar  
on  
Tamil Buddhism  
25th - 31 May 1992

INSTITUTE OF ASIAN STUDIES  
Madras, India. Ph: 416728 419866 4925085

&

UPPSALA UNIVERSITY  
Sweden

# 1992年度前期 開放セミナー

## 独立者・親鸞の大地—『歎異抄』に学ぶ—

講 師 大谷大学教授 小野蓮明 (真宗学)  
 期 間 5月13日(水)~7月8日(水) <5回>  
 時 間 水曜日 午後6時30分~8時30分  
 会 場 大谷大学多目的ホール  
 参加費 5,000円  
 概 要

「愚禿釈親鸞」と名のつた仏者の名を聞くと、人はその名のりの大地としての「真実」とは何であったかを、問い尋ねずにおれません。親鸞ほど徹底して人生の「まこと」を求めつけた人はありません。親鸞は「ただ念仏のみぞまことにておわします」といえるように、末法濁世に生きる人間の立脚地を、生涯「よきひと」と仰ぎつけた法然の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という教言に見出したのでした。

『歎異抄』は、その親鸞の教えの語録であり、今日親鸞を学ぼうとするものにとっての最もすぐれた資料であります。

『歎異抄』の編者(唯円)は、親鸞滅後の念仏共同体におこったさまざまな異義と混乱に対して、深い痛みと悲しみをもってその現実を批判し、如来の信を一にして共に願生浄土の道に生きるものの共同体であろうと、強く願うのです。そのような志願が歎異の魂です。それは、真実の教えに帰し、その教えにはぐくまれたものの深い責任感のなかでなされた信仰批判であり、同時に純粋な信心の回復、すなわち人間の本来性の回復を願う精神であります。

親鸞は、法然から学びえた選択本願の念仏の教えこそ、人間にとっての根源的な真理の道であることを明らかにして、「浄土の真宗」を大乘仏教の至極として人類に捧げたのです。その念仏の信心を、いま大地になさんとして歎異する人、その『歎異抄』に、われわれが人間であること確かな根拠と、まことの人間となる道を学びたいと思います。

### 日 程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	5月13日(水)	「歎異」のころ
2	5月27日(水)	出遇いにはじまる人生
3	6月10日(水)	いのちの願いと名のり
4	6月24日(水)	大いなる目覚め
5	7月8日(水)	無礙道に立つ

## ヴァイツゼッカー大統領を読む

講 師 大谷大学教授 大河内了義 (ドイツ文学)  
 期 間 5月16日(土)~7月11日(土) <5回>  
 時 間 土曜日 午後2時00分~4時00分  
 会 場 大谷大学多目的ホール  
 参加費 5,000円  
 概 要

1989年11月9日にベルリン市をまっぴたつに引き裂いていた「壁」が崩壊して以来、ドイツは、ヨーロッパは、そして全世界が、未曾有の激動期を迎えています。その中で「経済大国」となった日本からは「国際貢献」を求められており、他方ジャーナリズムでは「21世紀に向けて」という言葉が氾濫しており、一切は「未来」へと指向しているかにみえます。

しかし、私たちは今ここで一度足をとめて、過去を振り返ってみる必要がありはしないでしょうか。過去を正しく認識しない限り現在は明確にならないでしょう。現在が明確でなければ未来への方向は定まらないでしょう。

過去・現在・未来を通しての自分を知るためには他者という鏡が必要です。鏡に映してみればじめて自分の姿が見えてきます。そのためには、さまざまな相違点もちながらも、自ら戦争をはじめ、敗れ、しかも戦後は経済大国となったという相似点をもつドイツが、日本を知るよい鏡となります。

その作業を行うための最良のテキストとして1985年当時の西ドイツの、現在は統一ドイツの大統領リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーが行なった演説「荒野の四十年」があります。この演説を味読することによって私たちは(西)ドイツの過去及び過去との対決のあり様を知り、それを通して私たち日本のそれを知り、そして未来への方向を定める一助としたいと考えます。毎回質疑の時間をもって討論しながら、一緒に考えてみましょう。

### 日 程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	5月16日(土)	演 説 の 背 景
2	5月30日(土)	反 ユ ダ ヤ 主 義
3	6月13日(土)	戦 後 西 ド イ ツ の 償 い
4	6月27日(土)	分 割 の 苦 悩 と 統 一 の 現 在
5	7月11日(土)	日 本 の 現 状

## 研究所彙報 1992. 4—9

### ■真宗総合研究所仮事務所の設置

場所 講堂棟三階ラウンジ第4応接室  
期間 6月16日(火)～6月30日(火)

### ■真宗総合研究所移転

7月1日(火)  
新住所  
〒602 京都市上京区寺町今出川上ル2丁町鶴山町8  
TEL 213-2731 FAX 213-2741

### ■真宗総合研究所移転開所式

7月17日(金)午後4時30分 研究所25番研究室

### ■研究委員会

4月21日(火)午後5時50分 研究所会議室  
議題 1992年度の研究体制について  
5月20日(水)教授会終了後(午後6時30分)  
議題 研究所の在り方について  
7月14日(火)午後0時10分 博綜館第4会議室  
議題 研究所規程改定の件

### ■「指定研究」チーフ連絡会

4月16日(水)午後5時 研究所会議室  
議題 1992年度の研究体制について  
5月25日(月)午後5時50分 研究所会議室  
議題 研究所移転についての協議

### ■編集出版企画委員会

7月31日(金)午後4時 研究所会議室1  
議題 研究所の出版物について

### ■「指定研究」研究会

#### 大学史編纂研究

4月17日(金)午後4時30分 研究所22番研究室  
課題 「明治期における諸大学の学制について」  
発表者 延塚 知道 助教授  
6月2日(火)正午 研究所38番研究室  
連絡会  
7月8日(水)午後6時 研究所11番研究室  
議題 今後の研究計画について

#### 国際仏教研究

4月15日(金)午後2時30分 研究所21番研究室  
議題 1991年度報告書について  
1992年度の研究計画について  
4月23日(水)午後4時10分 研究所会議室

テーマ 「ドイツにおける仏教研究事情」  
講師 マールブルク大学 クリストフ・クライネ氏  
5月6日(水)午後0時10分 研究所会議室  
議題 1992年度の研究計画について(2)  
6月3日(水)午後0時10分 研究所21番研究室  
議題 研究所移転について  
今年度研究計画について  
7月15日(水)午後0時30分 博綜館第3会議室  
テーマ 「アメリカにおけるわたしの仏教研究」  
講師 デーポ大学 ポール・ワット博士  
7月23日(水)午後4時10分 博綜館第3会議室  
テーマ 「信心为本と悪人正機——外国人の理解と疑問」  
講師 中国国立社会科学院仏教研究室主任

楊 曾文 氏

#### 真宗史料研究

5月21日(水)午後4時 研究所会議室  
議題 「園林文庫の背景について」  
講師 柏原 祐泉 名誉教授

#### 西藏文献研究

5月19日(火)午後5時 研究所24番研究室  
議題 今年度の研究計画について  
6月26日(金)午後5時 研究所24番研究室  
議題 研究所移転について

#### 大藏経學術用語研究

6月18日(水)午後5時40分 研究所25番研究室  
議題 今年度の研究会のもちかたについて  
研究所移転について  
7月28日(火)午後4時 研究所24番研究室  
議題 研究の具体化について

### ■「一般研究」研究会

#### 仏教学教育法の研究

6月16日(火)午後0時30分 研究所36番研究室  
議題 研究所研究室の移転について  
7月14日(火)午後0時 博綜館第4会議室  
議題 今後の研究について  
7月21日(火)午後0時 博綜館第4会議室  
議題 インド仏教遺跡研修旅行のアンケートについて

### ■1992年度前期「開放セミナー」開催

#### §「独立者・親鸞の大地—『歎異抄』に学ぶ—」

講師 小野 蓮明 教授  
期間 ①5月13日(水)午後6時30分～8時30分  
②5月27日(水)午後6時30分～8時30分  
③6月10日(水)午後6時30分～8時30分  
④6月24日(水)午後6時30分～8時30分  
⑤7月8日(水)午後6時30分～8時30分  
会場 多目的ホール

§ 「ヴァイツゼッカー大統領を読む」

講師 大河内 了義 教授

期間 ① 5月16日(土)午後2時00分～4時00分

② 5月30日(土)午後2時00分～4時00分

③ 6月13日(土)午後2時00分～4時00分

④ 6月27日(土)午後2時00分～4時00分

⑤ 7月11日(土)午後2時00分～4時00分

会場 多目的ホール

■学会等参加

タミール仏教に関する国際セミナー

大学史編纂研究班の藤島建樹研究員は、インドのマドラスで、5月25日から31日まで開催された International Seminar on Tamil Buddhism に招聘された。国際仏教研究班の依頼で研究資料の収集を行なった。

第4回仏教とキリスト教の対話国際会議

国際仏教研究班のロバート・ローズ研究員は、アメリカのボストンで、7月30日から8月3日まで開催された Fourth International Buddhist-Christian Dialogue Conference に参加した。

第6回チベット研究国際会議

西藏文献研究班の白館戒雲研究員は、ノルウェーのファーゲルネスで、8月21日から28日まで開催された Sixth Conference of the International Association of Tibetan Studies に参加した。

第8回南山宗教文化研究所シンポジウム

武田武麿研究所所長は、名古屋の南山宗教文化研究所で、9月1日から2日まで開催された「第8回南山宗教文化研究所シンポジウム 宗教と文化を考える—諸宗教対話の反省と展望—」に参加した。

研 究 所 報 第 28 号

1992年9月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒 602 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel. 075-213-2731

Fax. 075-213-2741